

ライティングセンター運営上の工夫とその成果

AWC 立ち上げから 2 年間のデータの比較検討を通して

小林 至道[†], 中竹 真依子[†]

抄録 本稿は、青山学院大学アカデミックライティングセンター（AWC）が開設されてから 2 年間のデータを比較検討することを通して、ライティングセンターの運営上で施策してきた工夫とその成果について、実証的に明らかにすることを目的とした。AWC では、学生の書く力の向上を目指して、個別相談の質を保証しつつ、全学の学生に広く利用されること、書くプロセスで繰り返し利用されることを立ち上げ期における運営上の課題としてきた。データ分析の結果、学生の所属学科・研究科別の利用件数、相談文章の事前提出率、レポート・論文を書くプロセスでの利用のされ方、利用満足度の各数値において、運営上の工夫の成果が表れていることが明らかとなった。

キーワード : ライティングセンター, 運営, 支援の質保証, 利用のされ方, データ分析

Writing center operational efforts and outcomes:

A comparative study of data in the first two years after the launch of the AWC

Norimichi Kobayashi[†], Maiko Nakatake[†]

Summary The purpose of this study is to empirically examine the operational efforts and outcomes of a writing center by comparing the data collected in the first two years of launch of the Academic Writing Center (AWC). In the start-up period, the AWC made efforts to encourage as many students in various disciplines as possible to use the AWC and promote students' repeated use of the AWC in the writing process. Our efforts achieved some positive results in the following aspects: the number of students using the AWC from each department, the pre-submission rate of manuscripts, students' use of the AWC in the writing process, and users' satisfaction.

Keywords : Writing center, Operation, Quality assurance, Students' use, Data analysis

はじめに

1.1 目的

本稿は、青山学院大学アカデミックライティングセンター（以下、AWC）が個別相談によるライティング支援を 2017 年 11 月に開始してから 2 年間のデータを比較検討することを通して、ライティングセンターを運営する上で施策してきた工夫とその成果について、実証的に明らかにすることを目的とする。

1.2 研究の背景と意義

近年、国内の大学では、学生に対する新たな教育的

実践として、正課授業内外でライティング教育ならびに支援を提供していこうという動きが広まりつつある [1][2]。とくに 2010 年代に入って相次ぐライティングセンターの新設は、その象徴的な動向として挙げられ、本学 AWC もその一例といえる [3][4]。

これまでの国内ライティングセンターの動向を整理した最新の研究によれば、ライティングセンターは、利用者である学生自身が問題点を理解し、その問題点について主体的に考える「自立した書き手」を育てることを目的とし、学生が支援者であるチューターと 1 対 1 で対話しながら文章を検討する場であるという点で共通している [5]。そうしたライティングセンターにおける実践上の現状と課題については、佐渡島 (2009)

[†] 青山学院大学 アカデミックライティングセンター（青山）

の研究論文「自立した書き手を育てる」[6]を皮切りに、ライティングセンターの活動内容を概説する研究として佐渡島・太田[7]，飯野ら[8]，渡ら[9]，中澤[10]，ライティングセンターの支援者であるチューターの成長過程，育成方法の研究として太田・佐渡島[11]，中竹[12]，堀[13]などにおいて，各大学の具体的な事例の検討を通して明らかにされている。

しかし，こうした先行事例を参考に，授業外における組織的なライティング支援機関をいざ立ち上げ，その運営を担う責任者として実務的な立場に身を置いてみると，先行事例で示されているような具体的な実践の形にするためには，どのように組織を構築し，どのような仕組みで運営を展開していけばよいのか，そのプロセスが見えてこざイメージができないという，きわめて現実的な問題に直面する。

そこで本研究では，ライティングセンターを運営する立場から，学生の書く力の向上という目的のもと，どのような点で創意工夫を凝らし，どういうデータに着目しながら，ライティングセンターを形にしているのか，できる限り裏づけとなるデータを開示して，実証的に明らかにしていくことを目指す。したがって，現在，ライティング支援の組織的運営を担う立場にある者，これからそうした組織を立ち上げ，運営を担っていく立場にある者に対して，本研究はとくに意義のある知見を発信できるのではないかと考えられる。

2. 方法

2.1 青山学院大学 AWC の概要

青山学院大学では，AOYAMA VISION という全学的な取り組みを契機に，授業外でのライティング支援を担う機関として，2017年10月にアカデミックライティングセンターが新設された。2017年11月から青山キャンパス AWC（以下，青山 AWC），2018年4月からは相模原キャンパス AWC において，個別相談によるライティング支援を開始した。その目的は，利用者である学部生・大学院生の書く力（自分の考えを論理的に，筋道を立てて文章で伝える力）の向上である。

個別相談は原則予約制，1回45分（昼休みのみ30分），大学の時間割に合わせ1日8つの時間帯を相談枠として設けている。遮音性を担保するためにパーテーションで囲まれたブースを設置し，ブース内には机と椅子，筆記用具，メモ用紙，時計，情報検索をするための PC，情報共有をしやすくするためのモニター，

レポートや論文の書き方・作法に関するテキスト類，英和辞典や類語辞典などが手の届く範囲に置かれている支援環境下で，1対1の個別相談はおこなわれる。

AWC で相談できるのは日本語あるいは英語で書かれたレポート・論文・発表資料などのアカデミックな文章で，添削やネイティブチェックをするのではなく，ライティングプロセスにおける利用者と支援者間での対話を通して，書き手である学生自身が文章の問題点に気づき，どうすればより良い文章になるかを考え，書き，書き直すことを促す支援をおこなっている。

支援を担うチューターは，本学所属の大学院生で，青山 AWC の場合 2020年1月現在，和文の相談対応者17名，英文の相談対応者4名，両言語の相談対応者3名の計24名体制である。チューターの育成は，ライティング支援の専門家である著者らが担い，チューターとして一定水準のスキルの習得が確認されるまで，約1か月半におよぶ研修をおこなっている。この事前研修期間だけではなく，実際に学生対応をするようになった後も，個別相談の後に都度残す支援履歴や開室期間中に適時開催するミーティングを通して，チューターとしての日々の活動を振り返り，研鑽を重ねることによって，支援の質の保証をはかっている。

現状，青山 AWC の場合，利用者である学生には，予約システムを介して任意で，課題内容（例えば，どのようなレポート課題なのか，字数の条件など）と相談したい文章を，なるべく事前に情報提供してもらうようお願いしている。支援者であるチューターは，事前に提供された情報に目を通す作業を通して，利用者がどのような相談内容で来室するのか，どこに改善すべき問題点を抱える相談なのか，どのように相談者である学生自身の考えを引き出し，気づきを促す支援をするのか，といった点について可能な限り準備をした上で，対面での個別相談に臨む運営体制を敷いている。

2.2 データ

本稿で分析対象とするのは，青山 AWC が個別相談によるライティング支援を開始した 2017年11月21日から丸2年間のデータである。本稿では以下，1年目の 2017年11月21日から 2018年11月20日までを【2017 - 18】，2年目の 2018年11月21日から 2019年11月20日までを【2018 - 19】と表記する。

大学における IR（Institutional Research）の重要性が叫ばれるようになって久しい[14]。AWC では，利用者データの収集に際して，ICT を大いに活用している。

具体的には、個別相談の予約時の情報、個別相談における支援内容の情報などを、ワンストップのシステムを介してデータとして収集・蓄積し、ライティングセンターの運営、教育と研究に活かしている[15][16]。それらのデータのうち、本研究で分析に用いる変数は、所属(学科・研究科単位)、学年、相談日時、相談文章タイプ、利用回数、予約時の進行状況、相談文章の添付の有無、利用動機、課題提出日までの残り日数、相談/支援内容、利用満足度に関する項目である。

なお、本稿で用いるデータは、研究利用の承諾を利用者およびチューターから得ている。以下では、著者らが常駐し支援現場の運営を担う青山 AWC で収集したデータにもとづき、分析および考察をしていく。

3. 分析：基礎データの比較検討

表1は、【2017-18】【2018-19】の年間を通しての利用件数を、月別に示したものである。開室日数については、月間の総数のバランスをとるため4月と5月、7月と8月、9月と10月は合算した数値としている。

表1. 年間の利用件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
開室日数	25	21	21	27	20	16	11	141			
2017-18 利用件数	101	52	111	82	48	32	18	444			
1日平均	4.0	2.5	5.3	3.0	2.4	2.0	1.6	3.2			
開室日数	25	20	23	27	19	15	15	144			
2018-19 利用件数	82	77	193	80	58	75	52	617			
1日平均	3.3	3.9	8.4	3.0	3.1	5.0	3.5	4.3			

表1によれば、年間合計の数値はもとより、月ごとに見ていっても、前年に比べ【2018-19】の利用件数が順調に伸びていることがわかる。とくに、前期末のレポートや論文の課題提出期である7・8月の利用件数は193件(前年同期比82件増)、1日平均8.4件(同3.1件増)で、当時の支援現場の様子としては、ほとんどの提供枠に対して相談が入っている状況が連日のように続く盛況ぶりであった。

表2. 学年別の利用件数

2017-2018	度数	割合	2018-2019	度数	割合
1年生	262	58.7%	1年生	222	36.0%
2年生	42	9.4%	2年生	168	27.2%
3年生	29	6.5%	3年生	31	5.0%
4年生	72	16.2%	4年生	114	18.5%
大学院生	39	8.8%	大学院生	82	13.3%

表2では、学年別の利用件数を年ごとに示した。

【2018-19】は、2年生の利用率が前年比で17.8ポイント増と顕著に伸びた。一方で、1年生の利用件数と全体に占める割合が相対的に減少したのが特徴である。個別相談を開始して2年が経過し、開設当時の1年生が2年生となっても引き続き利用していることが、利用件数と、全体に占める割合の変化にあらわれている。

表3. 一利用者あたりの利用回数

2017-18	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	14回	16回	19回	合計
度数	102	42	16	14	6	4	1	1	4	1	1	1	194
割合	53.1%	21.6%	8.2%	7.2%	3.1%	2.1%	0.5%	0.5%	2.1%	0.5%	0.5%	0.5%	
2018-19	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	11回	28回	合計	
度数	174	66	25	15	7	6	1	1	2	4	1	302	
割合	57.6%	21.9%	8.3%	5.0%	2.3%	2.0%	0.3%	0.3%	0.7%	1.3%	0.3%		

表3は、各年、1人あたりの年間の利用回数を整理したものである。この数の合計が、実利用者数ということになる。【2018-19】は302名が利用し、前年から108名(前年比156%)増加した。そのうち、1回のみ利用者が174名(57.6%)、2回以上の複数回利用者が128名(42.4%)であった。複数回利用者が全体に占める割合は、前年から5ポイント減少した。

表4. 相談文章タイプ別の利用件数

相談文章のタイプ	2017-18		2018-19	
	度数	割合	度数	割合
レポート 日本語)	266	59.9%	313	50.7%
レポート 英語)	59	13.3%	82	13.3%
論文 日本語)	39	8.8%	122	19.8%
論文 英語)	22	5.0%	20	3.2%
発表資料 日本語)	13	2.9%	11	1.8%
発表資料 英語)	7	1.6%	10	1.6%
その他 日本語)	42	9.5%	34	5.5%
その他 英語)	2	0.4%	25	4.1%

表4では、相談文章タイプ別の利用件数を示した。青山 AWC は支援開始以来、その冠が示すとおり学生の“アカデミックな”ライティング活動を支援する場として、日本語あるいは英語のレポート、論文、発表資料(レポートや論文の口頭発表に伴うレジュメ・スライドなど)を支援の対象物としている。表4によれば、両年ともに、レポート、論文、発表資料の相談で全体の90%以上を占めている現状から、どのような相

談で青山 AWC を利用することができるのか、学生の間で一定の理解が定着しつつあるとみることができる。

2年間のデータを比較すると、【2018 - 19】は、「日本語の論文」に関する相談の割合が前年比で11ポイント増加している点の特徴的である。一方で「日本語のレポート」に関する相談は、件数こそ増えたものの、相談全体に占める割合としては、前年から9.2ポイント減少した。「その他」に区分される相談文章の例としては、海外留学やゼミ選考に際する志望理由書、学内外の大学院進学希望者や大学院生の研究計画書が挙げられる。そうしたタイプの文章相談において、とくに「英文に関する相談」が増加傾向にある。

表5. 相談時における課題提出までの残り日数

提出までの残り日数	2017-18 N=444)			2018-19 N=617)		
	度数	割合	累積割合	度数	割合	累積割合
0日	74	16.6%		30	4.9%	
1日	84	18.8%	35.4%	99	16.0%	20.9%
2日	38	8.5%	43.9%	69	11.2%	32.1%
3日	49	11.0%	54.9%	34	5.5%	37.6%
4日	25	5.6%	60.5%	40	6.5%	44.1%
5日	14	3.1%	63.6%	30	4.9%	49.0%
6日	8	1.8%	65.4%	30	4.9%	53.9%
7日	27	6.1%	71.5%	33	5.3%	59.2%
1週間から2週間	42	9.4%	80.9%	92	14.9%	74.1%
2週間から1か月	41	9.2%	90.1%	57	9.2%	83.3%
1か月から2か月	14	3.1%	93.2%	51	8.3%	91.6%
2か月以上	23	5.2%	98.4%	44	7.1%	98.7%
締切後	7	1.6%	100.0%	8	1.3%	100.0%

表5では、課題提出までに残り何日の状況で相談に訪れたのかを示した。【2017 - 18】は、提出の前日に相談に訪れる割合が18.8%と最も多く、提出まで「残り3日以内」の状況での相談が全体の54.9%であった。それに対して、【2018 - 19】は、最も多いのが提出前日(16.0%)である点は変わらないものの、提出まで「1週間から2週間」の状況での相談が全体の14.9%と高い数値を示した。累積割合の数値が半数を超えるのが「残り6日」であることからわかるように、前年と比べて【2018 - 19】は、提出までの残り日数に余裕がある状況での相談が全体的に増えた点に特徴がある。議論を先取りすれば、ここにも運営上の工夫の成果があらわれているといえるのだが、この点は後の考察で詳述する。なお、前年同様に【2018 - 19】も一定数あった「締切後」の相談は、レポートや論文に対する教員からの評価やコメントなどのフィードバックを踏ま

え、次回以降に備えてチューターと一緒に問題点を振り返ることを相談目的とする利用であった[17]。

表6-1と6-2では、学生からの相談に対して、チューターがおこなった支援内容を示した。ここでの類型化と数値は、学生の相談に対して「どのような支援をおこなったのか」、予め用意した選択肢(複数回答可)から選択する、あるいは、該当項目がない場合は「その他」として記述する形で、チューターが個別相談を終えた直後に残した記録をもとにしている。学生からの相談内容と、それに対する支援内容を示す指標という意味で、「相談/支援内容」と表記している。

表6-1. 相談/支援内容【2017 - 18】(N=444)

相談/支援内容	度数	割合
1 文章の構成① 序論・本論・結論など、課題に対して適切な形で文章全体が書かれているか)	253	56.7%
2 課題内容(授業概要・出題意図)を把握・理解できているかの確認	216	48.4%
3 文章の展開② 文章全体の流れ、段落間のつながり、文と文のつながりなど)	210	47.1%
4 本文への引用の仕方(地の文との区別、出典の明記)	184	41.3%
5 参考文献一覧の書き方、注釈の使い方	183	41.0%
6 文章の構成② 問い・主張・論証部分が、適切に書かれているか)	165	37.0%
7 文章表現① キーワードの定義づけ、日本語or英語の文法(語法など)	159	35.7%
8 文章の展開① 序論と結論の対応関係、引用文と自論のつながりなど)	136	30.5%
9 課題提出までのスケジューリング	113	25.3%
10 情報検索(文献の探し方、借り方、読み方)	95	21.3%

表6-2. 相談/支援内容【2018 - 19】(N=617)

相談/支援内容	度数	割合
1 課題内容(授業概要・出題意図)を把握・理解できているかの確認	330	53.5%
2 文章の構成① 序論・本論・結論など、課題に対して適切な形で文章全体が書かれているか)	317	51.4%
3 文章の展開② 文章全体の流れ、段落間のつながり、文と文のつながりなど)	274	44.4%
4 文章の構成② 問い・主張・論証部分が、適切に書かれているか)	243	39.4%
5 参考文献一覧の書き方、注釈の使い方	231	37.4%
6 本文への引用の仕方(地の文との区別、出典の明記)	225	36.5%
7 文章の展開① 序論と結論の対応関係、引用文と自論のつながりなど)	204	33.1%
8 文章表現① キーワードの定義づけ、日本語or英語の文法(語法など)	191	31.0%
9 文章全体の推敲(タイトルの検討を含む)	176	28.5%
10 テーマ決め(アイデア出し・問いの絞り込みのためのブレインストーミングを含む)	131	21.2%

各年の「相談/支援内容」上位10項目を多い順に示した表によれば、上位項目では、この2年間でそれほどの変化はない。【2018 - 19】で最多は、「課題内容を把握・理解できているかの確認」の53.5%であった。青山 AWC では、教員からどのような課題が出ているかの確認と、それに従って書けているかどうかを重視して個別相談を進めるよう、チューターには研修の段階から運営上の共通認識の一つとして伝えている。その成果の表れともいえるが、実際は、学生がその課題においてはじめて相談に訪れた時点で、「出された課題の意図がわからない」、「何を書いたらよいかわからない」状態であることの表れであるともいえる。

ある程度書かれた文章において、どのような相談が多く、どのような点で支援をする必要がある文章が多いのかという点では、どうだろうか。各年の項目と数

値を見比べてみると、「序論・本論・結論など、課題に対して適切な形で文章全体が書かれているか」、「レポートや論文の問い・主張・論証部分が、適切に書かれているか」といった文章構成にかかわる点、「文章全体の流れ、段落間のつながり、文と文のつながり」といった文章展開にかかわる点、「本文への引用の仕方」、「参考文献一覧の書き方、注釈の使い方」といったアカデミックな文章を書く上での引用のルール・表記方法にかかわる点が相談/支援内容の上位を占めることは、この2年間で共通する特徴といえる。

表7-1. 利用動機【2017-18】(N=381)

利用動機	度数	割合
1 以前利用して良かったので	158	41.5%
2 授業・研究室・ゼミ担当教員からの指示・紹介	120	31.5%
3 学内のチラシ・掲示板を見て	74	19.4%
4 AWCのガイダンス、公開セミナーを受けて	36	9.4%
5 友人から聞いて	28	7.3%
6 AWCや図書館などホームページを見て	13	3.4%
7 図書館カウンターからの案内で	12	3.1%

表7-2. 利用動機【2018-19】(N=572)

利用動機	度数	割合
1 以前利用して良かったので	211	36.9%
2 ライティングスキルアップのため自主的に	145	25.3%
3 授業・研究室・ゼミ担当教員からの指示・紹介	123	21.5%
4 学内のチラシ・掲示板を見て	87	15.2%
5 友人から聞いて	48	8.4%
6 AWCのガイダンス、公開セミナーを受けて	47	8.2%
7 AWCや図書館などホームページを見て	27	4.7%
8 図書館カウンターからの案内で	18	3.1%

表7-1と7-2では、予約時に任意で尋ねている利用動機（複数回答可）を示した。【2018-19】では、前年の回答において「その他」の自由記述で多かった「書く力を身につけたいため」、「自主的に」というキーワードを含めた選択肢、「ライティングスキルアップのため自主的に」を新設した。そのため、各年の数値を単純には比較できない点に留意が必要である。

表によれば、「以前利用して良かったので」が各年ともに最も多い回答であった。先に表3で示したとおり、そもそも複数回利用者が全体の4割強であることを勘案すると、ほとんどの複数回利用者は「以前利用して良かったので」また利用した様子を窺い知ることができる。【2018-19】でその次に多かったのが、「ライテ

ィングスキルアップのため自主的に」で、25.3%と高い数値を示した。一方で、「授業・研究室・ゼミ担当教員からの指示・紹介」で利用した学生は、【2018-19】では21.5%で、相対的に高い数値は示しているものの、前年に比べて10ポイント減少した。この点の運営上の工夫と背景要因については、考察にて詳述する。

4. 考察：運営上の工夫とその成果

ライティングセンターを運営する上でその難しさを痛感させられる点の一つとして、運営する側が前提としている理念や方針と、実際の利用のされ方は、必ずしも最初から一致するわけではないという問題がある。実際には、増地（2019）が指摘するとおり、運営する側が前提とする「指導方針に基づく支援が困難な場合が多々ある」のが現実で、「他大学の施設やノウハウをそのまま適用することはできない」場面に直面することが少なくない[18]。これまで大学に限らず、小・中・高校の学校教育全般においてライティング教育・支援が組織立っておこなわれることの方が珍しい教育環境で育ってきている学生に対して、ライティングセンターとはどういうところなのか、何ができるところなのかを明示的に発信し続ける一方で、当の利用者の側において、ライティングセンターがどういう場所であり、どう利用できるのかを理解してもらうことが、とくに立ち上げ期の運営上、直面する現実的な課題となる。

本章では、ライティングセンターが提供するサービスの核である「個別相談によるライティング支援の質を保証しつつ、運営する側の理念・方針に沿った利用をどの程度、具現化できているのか」という問題点について、実際の利用データにもとづき考察する。

4.1 利用のされ方の経年比較

4.1.1 利用者の所属学科・研究科の広まり方

AWCは、特定の学科・研究科専属の機関としてではなく、全学に開かれた“センター”として、本学に設置された機関である。したがって、開設以来の当面の目標は、いかに多様な学科・研究科の学生に利用してもらえるように学内の認知を広めていくか、という点であった。この学内認知の広め方については、中・長期的なビジョンで広報活動をおこなってきている。具体的には、開設当初からこの2年間は、学生の誰もが参加できるライティングセミナーの開催や広報チラシの発信によって、どの時期に、どのような内容でAWCの存在、活動内容を学内で周知・展開するのが効果的な

のか、トライ&エラーを繰り返している[5][17][19].

一方で、たとえば多田ら(2019)の事例のように、特定の学生を利用対象とするいわゆる授業連携を、青山 AWC からはおこなわない方針でこれまでは運営を進めてきている[17][20]. その理由は、個別相談の提供枠数がまだ十分に整っていないなか、特定の学科・研究科の、特定の授業の学生によって、個別相談の利用が占められてしまうことを避けたいからであった.

以上の経緯を踏まえて、開設以来2年間の学科・研究科別の利用データをみていく. 表8-1, 8-2では、青山キャンパス所属の全16学科, 10研究科の学生の利用状況について、利用件数の合計, 最大値, 最小値, 1学科・1研究科あたりの平均値, 標準偏差を示した.

表8-1. 青山キャンパス所属16学科の利用状況

	2017-18	2018-19
利用件数合計	405	525
最大値	152	89
最小値	0	3
1学科平均	25.3	32.8
標準偏差	35.7	23.3

表8-2. 青山キャンパス所属10研究科の利用状況

	2017-18	2018-19
利用件数合計	37	82
最大値	13	23
最小値	0	0
1研究科平均	3.7	8.2
標準偏差	4.5	7.4

青山AWCがある青山キャンパス所属の16学科のうち、【2017-18】は15学科、【2018-19】は16学科すべての利用があった. 表8-1によれば、標準偏差が、【2017-18】の35.7から【2018-19】の23.3に変化していることからわかるとおり、1学科あたりの利用件数のバラツキ(分散)も小さくなってきている.

同様に、大学院生については、青山キャンパス所属の10研究科のうち、【2017-18】は6研究科、【2018-19】は8研究科所属の学生によって利用された. 利用されなかった研究科が法科大学院など、資格取得を主

目的とし、レポート課題や学位論文の執筆が課されていない研究科であったことを考慮すると、利用学生の所属が徐々に多様化し、【2018-19】は、ほぼすべての研究科に所属する大学院生が、青山 AWC を利用したとみることができる. 一方で、標準偏差を比較すると、前年の4.5から7.4へと変化していることから、前年に比べて【2018-19】は、1研究科あたりの利用件数にやや偏りが生じた1年間であったことがわかる.

これらの点から、立ち上げ期のこの2年間において、全学生を利用対象とした授業外ライティング支援機関として、青山 AWC の位置づけが学内で着実に定着しつつあるということができているのではないだろうか.

表9. 学科別の利用件数(上位5学科)

2017-18 N=444)				2018-19 N=617)			
学科	度数	割合	学科	度数	割合		
1 国際政治学科	152	34.2%	1 英米文学科	89	14.4%		
2 英米文学科	67	15.1%	2 国際政治学科	74	12.0%		
3 マーケティング学科	23	5.2%	3 経済学科	56	9.1%		
4 教育学科	22	5.0%	4 総合文化政策学科	51	8.3%		
5 史学科	21	4.7%	5 法学科	38	6.2%		

表9では、学科ごとの利用件数について、各年で利用の多かった上位5学科を示した. 【2017-18】は、国際政治学科の学生の利用が34.2%と際立っていた. さまざまな観点からその原因を追究したところ、同学科初年次必修科目の特定のクラスにおいて、授業担当者から青山 AWC の利用を半強制的に促すような働きかけがあったことが判明した. その反省を経て、【2018-19】は、特定の授業から青山 AWC の利用を促す強制力は働かない状況下で運営を進めることができた1年間であった. この結果からもわかるとおり、たとえば、AWC を利用することをレポート課題の条件とし、利用したこと自体が成績評価に加点されると学生が認識するような授業担当者からの働きかけは、AWC のような授業外機関の利用の増減に非常に大きな影響を及ぼす. この点をどこまで見越した上で、どのように授業との連携をはかっていくかは、ライティングセンターの運営を進める上で、重要なポイントとなる.

4.1.2 相談時の進行状況

表10は、相談したい課題に関する文章について、「まだ何も書いていない」状態から「一通り書き上げた」状態までの5段階から、予約時に学生が自己申告した進行状況を整理したものである.

この2年間の現状では、約4割の学生が文章を「一通り書き上げた」状態で、青山 AWC を利用していることがわかる。各年の数値を比較すると、【2018 - 19】は、「まだ何も書いていない」状態で利用する学生が、前年比で8.2ポイント増加している点特徴的である。こうした数値から、本学において、ライティングセンターは、「一通り書き上げた状態の文章を見てもらうところ」と位置づける学生が最も多い一方で、「まだ何も書いたものがない状態でも相談に行っているところ」と位置づける学生が、徐々に増えつつある過程とみることができる。今後は、「少しだけ書いた」から「もう少しで書き上げられそう」という、まさに文章を書いているプロセスで悩みを抱える学生が気楽に来室できるようにしていくことが、運営上の課題といえる。

表 10. 相談時の進行状況

相談時の進行状況	2017-18		2018-19	
	度数	割合	度数	割合
まだ何も書いていない	75	16.9%	155	25.1%
少しだけ書いた	78	17.6%	99	16.0%
半分くらい書いた	41	9.2%	54	8.8%
もう少しで書き上げられそう	69	15.5%	74	12.0%
一通り書き上げた	181	40.8%	235	38.1%

4.1.3 相談文章の事前提出率

これまでの国内ライティングセンターにおいては、対面でおこなわれる個別相談に支援者がどのように臨むか、という点で、大きく二つのタイプに分類することができる。一つは、利用者が相談したい文章を個別相談のその場ではじめて共有し、いわば即興で文章支援に臨むタイプがある。もう一つは、事前に相談したい文章を入手し、対面での支援を開始する前に可能な限りそれに目を通した上で、文章支援に臨むタイプである。それぞれにメリット、デメリットがあるなかで、このどちらのタイプを選択するか、あるいは、新たに第三の選択肢を生み出すかは、ライティングセンターを運営する上では非常に重要なポイントとなる。

その選択の決め手となる準拠点の一つとして、自大学の学生の実態を見極める必要がある。ここでいう学生とは、利用者となる場合はもちろんのこと、支援者となる場合も含まれる。実態とは、大学教育を受ける以前からレポートや論文を書いた経験がどの程度ある

のか、大学入学後にアカデミックな文章の書き方を教えられ、書く実践をする機会がどの程度あるのかなど、アカデミックな文章を書くことを巡り学生が置かれている現状を把握することを指す。たとえば、「〇〇大学がそうしているから、ウチも同じようにしてみよう」と安易に決めるわけにはいかず、自大学の実態に即した判断が、支援現場の運営を担う者には求められる。

青山 AWC の場合、利用者である学生になるべく事前に相談文章を提供してもらうようお願いしている。チューターは、事前に提供された文章に対して、可能な限り広くかつ深く分析的に目を通す作業を通して、どこに問題点を抱える相談（文章）なのか、どのように書き手である学生の考えを引き出し、気づきを促す支援をするのか、といった点について準備をした上で、対面での相談に臨む運営体制を敷いている。言い換えれば、その場ではじめて目にする文章に対して即興でその問題点を把握し、利用者自身の気づきを促すような支援を提供することは、支援の質の保証上、本学の大学院生チューターにとって困難という運営上の判断をしたということになる。チューターはできる限り相談文章に目を通すなどの事前準備をし、1回 45 分という限られた相談時間のうち、利用者との対話を通して一緒に問題点を検討することに最大限時間を充てられるような仕組みにするのが、最善と考えたからである。

表 11. 予約時の文章提出の有無

予約時の文章提出	2017-18 N=369)		2018-19 N=462)	
	度数	割合	度数	割合
あり	179	48.5%	286	61.9%
なし	190	51.5%	176	38.1%

表 11 では、相談したい文章の事前提出の有無を示した。ここでの数値は、両年ともに全体の利用件数から「まだ何も書いていない」状態での件数を引いたものとなっている。【2017 - 18】は、何かしら書かれたものがある状態での相談のうち、予約時にその文章を提出した割合が 48.5%であった。それに対して【2018-19】は、その割合が 61.9%と、前年比で 13.4 ポイント上昇した。青山 AWC では、システムを介して相談の予約が入ってから対面での相談日時を迎えるまでに、「まだ何も書いていない」状態での相談を除いて、相談したい文章を事前に添付ファイルで送信してもらうよう促すメールを、該当学生に都度送っている。この2年間での上記の数値の変化には、そうした運営上の地道な

工夫の成果が表れているといえるのではないだろうか。

4.1.4 提出までの利用のされ方にみる変化

表 12 - 1, 12 - 2 は, 課題提出まで残り何日で個別相談を利用したのか, レポートと論文の文章タイプ別にそれぞれ示したものである。

まず表 12 - 1 でレポートの相談から見ていこう。

【2017 - 18】の利用傾向の特徴として, 提出間際の利用が非常に多かった点が挙げられる。提出当日の相談が 18.8%, 同前日が 20.9%, 提出まで 3 日以内の利用で実に全体の 60.6% を占めた。表では示せなかったが, 個別相談を「はじめて」利用したのがいつなのかに着目すると, 提出当日にはじめて利用したのが 15.0%, 同前日が 18.8%, 提出まで 3 日以内にはじめて利用した学生が全体の 50.4% という状況であった。

表 12 - 1. レポート相談の場合の提出までの残り日数

提出までの残り日数	2017-18 N=325)		2018-19 N=394)	
	度数	割合	度数	割合
0日	61	18.8%	24	6.1%
1日	68	20.9%	64	16.2%
2日	32	9.8%	42	10.7%
3日	36	11.1%	23	5.8%
4日	19	5.8%	31	7.9%
5日	11	3.4%	22	5.6%
6日	7	2.2%	24	6.1%
7日	18	5.5%	24	6.1%
1週間から2週間	26	8.0%	72	18.3%
2週間から1か月	19	5.8%	36	9.1%
1か月から2か月	9	2.8%	16	4.1%
2か月以上	9	2.8%	11	2.8%
締切後	5	1.5%	5	1.3%

もちろん, 来室してくれた学生に対しては, 可能な限りの支援をおこなうわけだが, 提出間際にはじめて訪れ, その 1 回きりの相談で課題を提出していく学生を見るにつけ, 果たしてこれでどこまで学生の書く力を伸ばすことに寄与できていると言えるのだろうか, との思いを抱かずにはいられなかった。こうした利用のされ方を踏まえて, ライティングセンターのより効果的な利用の仕方の一つとして, 「締め切りまでに余裕をもって, できれば複数回利用すること」を趣旨とした広報チラシを作成したり, 同趣旨を伝える利用ガイ

ダンスを複数回開催したりして, 改善をはかってきた。

そうした工夫後の【2018 - 19】は, 提出当日の利用が 6.1% (前年比 12.7 ポイント減), 同前日が 16.2% (同 4.7 ポイント減), 提出まで 3 日以内の利用が 38.8% (同 21.8 ポイント減) であった。「はじめて」の利用時に着目すると, 当日が 5.6% (前年比 9.4 ポイント減), 前日が 10.6% (同 8.2 ポイント減), 提出まで 3 日以内にはじめて利用は 32.3% (同 18.2 ポイント減) と, 前年に比べて, 数値的に大幅に改善していることがわかる。提出間際の利用件数が相対的に減少した一方で, 提出まで残り「1 週間から 2 週間」での相談の割合が最も多く 18.3% (前年比で 10.3 ポイント増) を占めるなど, 全体的に「提出まで余裕をもって」利用する学生が増えた点が, レポートの相談に関する特徴といえる。

表 12 - 2. 論文相談の場合の提出までの残り日数

提出までの残り日数	2017-18 N=61)		2018-19 N=139)	
	度数	割合	度数	割合
0日	3	4.9%	3	2.2%
1日	3	4.9%	11	7.9%
2日	2	3.3%	13	9.4%
3日	2	3.3%	6	4.3%
4日	2	3.3%	5	3.6%
5日	1	1.6%	4	2.9%
6日	0	-	2	1.4%
7日	7	11.5%	5	3.6%
1週間から2週間	9	14.8%	11	7.9%
2週間から1か月	14	23.0%	17	12.2%
1か月から2か月	5	8.2%	29	20.9%
2か月以上	12	19.7%	30	21.6%
締切後	0	-	3	2.2%

次に, 表 12 - 2 で論文の相談について見ていこう。

【2017 - 18】は, 提出まで残り「2 週間から 1 か月」の利用が最頻値の 23.0% で, 提出まで残り 2 週間以上ある状況での利用が, 論文の相談全体の 50.9% を占めた。「はじめて」の利用時に着目すると, 提出の締め切りまで残り 2 週間以上ある状況ではじめて利用した学生が全体の 62.1% であった。

これに対して【2018 - 19】は, 提出まで残り「2 か月以上」での利用が最頻値の 21.6%, 提出まで残り 2 週間以上ある状況での利用が, 全体の 54.7% (前年比 3.8

ポイント増)であった。「はじめて」の利用時に着目すると、残り2週間以上ある状況ではじめて利用した学生が論文の相談全体の60.0%(前年比2.1ポイント減)であった。こうした数値から、論文の相談に関しては両年ともに、提出まで比較的余裕がある時期からAWCを利用している様子を窺い知ることができる。

以上の考察からライティングセンター運営上の問題として重要なのは、提供サービスの核である個別相談をより効果的で意義あるものにするために、「ライティングセンターとは何ができるところなのか」、「いつ、どのように使うのか」という点で、利用者側の理解、協力が欠かせないということである。いくら運営者側が崇高な理念や方針を掲げても、いくらチューターを育成し高い水準で揃えても、課題提出の数日前にはじめて利用する学生が多数を占めるようでは、学生の書く力を向上させるライティングセンターとして機能するには限界があると言わざるを得ないからである。

4.1.5 利用満足度

青山AWCでは、個別相談後、利用した学生に対して任意で、アンケート調査に協力してもらっている。そのうち、「今回の相談に満足しましたか」と4件法で尋ねた設問の集計結果を示したのが表13である。利用者アンケートは無記名回答で、学期単位で集計しているため、2018年度前期(2018年4月から8月)、2018年度後期(2018年9月から2019年1月)、2019年度前期(2019年4月から8月)という区分で整理した。

表13. 青山AWCの個別相談利用満足度

選択肢	2018年度前期 N=259)		2018年度後期 N=233)		2019年度前期 N=326)	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
とても満足した	222	85.7%	185	78.7%	235	72.1%
満足した	34	13.1%	48	20.4%	85	26.1%
あまり満足しなかった	2	0.8%	2	0.9%	4	1.2%
満足しなかった	1	0.4%	0	0.0%	2	0.6%

これまで上述してきたライティングセンター運営上の工夫は、結局のところ、それが利用した学生にどのように届き、どのように受け止められたかの検討を抜きには語れない。その成果をはかる一つの指標として、利用者の満足度を見ていくと、「とても満足した」「満足した」とポジティブな回答の合計が、どの学期でも98%から99%と、非常に高い数値を示していることがわかる。今後も引き続き、この水準をできる限り維持

していくことが運営上の課題といえる。

5. おわりに

5.1 結論

本稿では、青山AWCが個別相談によるライティング支援を開始した2017年11月以来、支援現場の運営を担う立場である著者らが、ライティングセンターを運営する上で施策してきた工夫とその成果について、2年間のデータにもとづき実証的に検討してきた。

青山AWCでは、学生の書く力の向上を目指して、個別相談の質を保証しつつ、全学の学生に広く利用されること、書くプロセスで繰り返し利用されることを立ち上げ期における運営上の課題としてきた。課題を解決するために、ライティングセミナーの開催や広告用チラシの作成、個別相談の質を担保するための仕組みづくりなど、さまざまな工夫を施してきた。そうした施策の成果は、学生の所属学科・研究科別の利用件数、相談文章の事前提出率、レポート・論文を書くプロセスでの利用のされ方、利用満足度の各数値において、データとして表れていることが明らかとなった。

5.2 今後の課題

以上の議論を踏まえた今後の運営上の課題として、利用者数をもっと増やすことが挙げられる。ただ単に数を増やすのではなく、時期による利用のバラツキを減らし、年間を通して安定した利用を確保、維持できるような運営体制にしていきたい。青山AWCの場合、レポートや学位論文の提出時期にあたる学期末の利用は、前期の7月、後期の12月上旬から1月中旬までの間、連日ほぼ満員の状況である。一方で、たとえば11月など、利用が一時的に落ち込む時期があるのも事実である。そうした閑散期の利用件数を少しでも増やせるよう、さらなる運営上の工夫をしていく必要がある。

参考文献

- [1] 金子泰子(2016)『大学における文章表現指導 - 実践の記述と考察から指導計画の提案まで -』溪水社。
- [2] 村岡貴子・鎌田美千子・仁科喜久子編(2018)『大学と社会をつなぐライティング教育』くろしお出版。
- [3] 西菜穂子(2017)「日本語ライティングセンター - 2010年度からの活動を振り返って - 『神田外国語大学紀要』第29号, pp.463-482.

- [4] 上田大輔・尾崎文代・高橋努 (2017)「大学図書館の機能を拡張し発展させる広島大学ライティングセンターの取り組み」『大学図書館研究』第105巻, pp.75-84.
- [5] 井下千以子・佐藤広子・小林至道・岩崎千晶・佐渡島紗織・柴原宜幸・大島弥生・成瀬尚志・関田一彦 (2020)「ライティング・センターの機能と展望 正課と正課外をつなぐライティング教育をめざして」『大学教育学会誌』第41巻, 第2号, pp.90-94.
- [6] 佐渡島紗織 (2009)「自立した書き手を育てる - 対話による書き直し -」『国語科教育』66巻, 全国国語教育学会, pp.11-18.
- [7] 佐渡島紗織・太田裕子 (2013)『文章チュータリングの理念と実践 - 早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房.
- [8] 飯野朋美・稲葉利江子・大原悦子 (2015)「個別相談とライティング支援の可能性 - 津田塾大学ライティングセンターの活動分析から」『津田塾大学紀要』第47巻, pp.133-148.
- [9] 渡寛法・中島宏・佐渡島紗織 (2016)「ライティング・センターにおける文章作成支援の現状と課題 - 学生アンケートの自由記述分析から -」『大学教育学会誌』第38巻, 第2号, pp.77-86.
- [10] 中澤務 (2019)「第1章 書く力の育成とライティングセンター」関西大学ライティングラボ・津田塾大学ライティングセンター編『大学におけるライティング支援 どのように〈書く力〉を伸ばすか』東信堂, pp.3-26.
- [11] 太田裕子・佐渡島紗織 (2012)「自立した書き手を育成するライティング・センターのチューター研修とチューターの意識 - 早稲田大学における実践事例と PAC 分析」『Waseda global forum』vol.9, 早稲田大学国際教養学部, pp.237-277.
- [12] 中竹真依子 (2017)「ライティング・センターのチューターの成長に関する一考察」『The Basis (武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要)』第7号, pp.21-36.
- [13] 堀一成 (2018)「第9章 ライティングを支援できる人材の育成 大学院生を対象とした教育実践」村岡貴子・鎌田美千子・仁科喜久子編『前掲書』くろしお出版, pp.157-175.
- [14] 鳥居朋子 (2005)「大学におけるインスティテューショナル・リサーチの実効性に関する考察 - 米国及び豪州の事例を手がかりに -」『名古屋高等教育研究』第5号, pp.185-203.
- [15] 稲葉利江子・小林至道・毛利美穂・本村康哲 (2015)「ユーザ中心設計に基づいた学習ポートフォリオの設計」『信学技報』115 (295).
- [16] 本村康哲・稲葉利江子・毛利美穂 (2019)「第5章 e ポートフォリオを活用する」関西大学ライティングラボ・津田塾大学ライティングセンター編『前掲書』東信堂, pp.121-154.
- [17] 小林至道・中竹真依子 (2019)「ライティングセンター運営上の現状と課題 青山 AWC の立ち上げから1年間の量的データにもとづく分析」『青山インフォメーション・サイエンス』Vol. 46, No.1, pp.4-9.
- [18] 増地ひとみ (2019)「日本語ライティング支援に携わる学部生チューターの研修 - 「教える」と「考えさせる」を区別するマトリクスの提案 -」『リメディアル教育研究』第13巻, pp.1-12.
- [19] 小林至道・中竹真依子・天野朗子・近藤泰弘 (2018)「大学図書館とライティングセンターの協働による効果的なライティング支援」『第66回日本図書館情報学会研究大会発表論文集』日本図書館情報学会, pp.5-8.
- [20] 多田泰紘・岩崎千晶・中澤務 (2019)「ライティングセンターと教員の連携がプロセスに沿った継続的なライティング学習に与える効果」『大学教育学会誌』第40巻, 第2号, pp.46-53.



小林 至道

青山学院大学大学院文学研究科教育学専攻博士前期課程修了. 同博士後期課程単位取得満期退学 (2013). 関西大学教育推進部特任助教 (2013~2017) を経て, 2017年10月より現職. 専門は教育学. アカデミックライティング支援方法の研究, 教育実践に従事.



中竹 真依子

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士課程・博士課程修了. 博士 (学術). 武蔵野大学人間科学部専任講師, 帝京大学理工学部専任講師を経て, 2018年4月より現職. 専門は応用言語学, 英語教育, 第二言語ライティング.